

右の如く、古代人は「息、いのち、魂」を三位一体として扱っていたように思える。それにしても何故吸気ではなく呼気なのか。海軍経理学校の同期で東大医学部卒、国立小児科病院外科部長、筑波大学副学長を経て、現在曹洞禅寺の住職をしている長友にこの素朴な疑問をぶつけてみた。老師はニコリして「何事もインプットよりアウトプットの方が難しく重要なんですよ」とのみ答えた。

今にして老師の言葉が理解できる。私の日常の些細な出力が外界に変化をもたらし、それが入力となって私に撥ね返ってくる。和顔愛語は荒い息のもとでは出来ない。

私は既に日本人男性の平均寿命を越えた。別に長生きしたいとは思わぬが、「たまき

はるいのち」は維持したい。そして最後のブネウマを吐き出す時、東大寺再建の勸進の為に二度目の陸奥の旅に出た西行が小夜の中山を越える時詠った「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」の歌の「いのちなりけり」の感動を味わえれば幸である。

(元三菱銀行勤務)

一生の財産

「津田ゼミ」

逢見直人と
達見直人
(昭51社)

「光あるうちに光の中をあゆめ」。ゼミ誌「しんめい」創刊号で、津田眞激先生はゼ

ミ生に向けてこの言葉を贈られた。これはトルストイの小説の題名で、「光」とは神をさしているのだが、先生は、それとは別に「光あるうちに」、すなわち希望と若さがあふれているうちに、意味のある人生をしつかり歩いてほしいという意味で使われた。

私が津田眞激先生のゼミナールに入門したのは一九七四年四月であった。労働問題を学びたいと考えて一橋大学に入学した。先生は当時四十八歳で、精力的に研究活動に取り組んでおられ、ゼミでは産業社会学や、テラーの「科学的管理法」などを輪読した。やがて先生の研究テーマである日本の経営論に集中した勉強をするようになった。ゼミの指導は厳しかった。報告を終えて「やれやれ」と思っ

いると、あの一言が返ってくる。「それで……?」「要するにどういうこと、それで君はどう思う?」を凝縮した質問が「それで?」の一言であり、ゼミ生の報告に不満がある時に、この質問が発せられた。

就職にあたって、私は労働問題を選択したいと考えていたが、具体的なイメージを描くことができずにいた。卒業前年の暮れ、先生のご自宅を訪ねた時に、「ある労働組合から書記を採用したいと言っているがどうか」というお話があり、気持ちがあ動いた。先生の紹介で、当時のゼンセン同盟に入り、今もこの仕事を続けている。先生の一言で私の職業人生は決まったようなものだ。
ゼミは一生のつきあいとい

う先生の言葉そのままに、卒業後も月一回土曜日の午後、先生の自宅で開いていた「土曜会」に参加した。「土曜会」は先生が以前勤めていた武蔵大学、中央大学の卒業生を中心にした勉強の場であった。先生を主査に、院生や私も加わって実施した「流通業におけるパート労働の実態調査」は、その後、パート労働問題を研究する際の必読文献となった。研究会は夏は軽井沢の別荘で行われ、奥様と雑談をするのも楽しいひとときであった。

先生は毎年一月二日、ゼミ生のために自宅を開放してくださった。卒業生が次々と年始めに訪れては、近況を語り、議論するのが恒例であった。奥様はこの日のために、暮れの二十九日から料理づくりに

没頭されていたと伺っている。一九九〇年、突然の事故で先生は奥様を亡くされた。夕食後のひととき、奥様との会話を楽しみにされていた先生にとつて、悲しみはいかばかりであったろうか。少しでも話し相手になればという思いで、月一回日曜日の午後、先生を囲む読書会「輪の会」を有志で開催した。「輪の会」は毎回午後十時を過ぎる頃まで続いた。歴史、宗教、政治、経済、教育、経営の問題などテーマは幅広く、先生のお話はいつも興味深いものであった。

先生が脳梗塞で倒れられたのは、二〇〇〇年十二月だった。話好きだった先生から言葉が出なくなつた。病院でも先生を囲んだ会は続けられ

た。先生は私たちの顔を見るとうれしそうに微笑み、体調の良い時にちよつとした言葉が出てくることがあった。最後にお見舞いしたのは今年七月二十三日、五十年卒のゼミテンと一緒だった。「また来ますね」と先生の手を握ったのが、最後のお別れになってしまった。

肺炎が悪化して九月二日、先生は七十九年の人生を閉じられた。十五年前に奥様の遺骨を拾った同じ火葬場で、先生の遺骨を拾わせていただいた。思えば、卒業以来三十年間、ずっと先生から教わり続けてきた。先生の下で、読んだ書物も相当の量になった。私にとつて、津田ゼミナールは一生の財産である。そのことを誇りに思う。
(「連合」副事務局長)

個人住宅から大規模建築まで
ひとと未来に、やさしい空間
を創造します



KOKENSHA

専務取締役 吉田 佑一(昭41社)
e-mail:yoshida1966@mercury.ne.jp

株 興 建 社
〒167-0051 東京都杉並区荻窪5-8-14
TEL: (03)3392-6911(代)
FAX: (03)3398-3650

渋谷 隆之(昭44社) 矢作 和幸(昭58法)

グループ会社
中津興産株 ~不動産事業全般 MCS 武蔵野株 ~介護事業・グループホーム運営